

行動型アクティブラーニングの実践：「体育実技（海洋実習）」 を事例として

塩川 満久（県立広島大学保健福祉学部）、中瀬古 哲（同人間文化学部）
楠掘 誠司（同生命環境学部）

1. はじめに

本学は、3つのキャンパスから構成されており、体育実技はそれぞれのキャンパスで独立した実施形態をとっている。三原キャンパス（保健福祉学部）では、保健福祉にかかわる5つの学科が職域内に限定させず「チーム医療」を念頭に置いた相互協力集団構築のためグループ形式の教授・学習システムが実施されている。体育実技も学科を超えた構成にすることによりその目的達成の一端を担う役割をはたしている。すなわち、個人の種目選択より構成されるグループにより、身体活動を通じた組織や競争・共同の関係で共通目的達成のため協力する体制である。そのためには、専門外の認識や経験値による情報の共有だけではなく、分析能力と自己フィードバックが不可欠となる。

2. 講義の目的と実施形態

一部の学科を除き体育実技は保健体育理論と選択必修であるが、学部定員190名の学生がほぼ全員受講する。そして、専門実習等が3セメスター以降に多数設定されている医療・福祉系の学科構成のため、実質上、一年次前期の受講が必須となる。なお、夏季集中講義と後期開講の保健体育理論を履修することによりドロップアウトした学生が領域で単位を落とすことがないよう配慮している。

体育実技は施設環境と安全管理の理由よりクラス40名を定員とし、ポピュレーションを考慮し6種目の講義を提供している。競技特性や実施目的により開講間で多少異なるが、体力や運動能力向上を問わない講義目的にしている。また、レギュレーションを変更した、高齢者や障がい者に特化した類似種目を比較材料として学習内容に加えることにより運動の体系化を学習できる。加えて、他の講義科目の学習内容（生理・解剖学や運動学他）を指導場面で流用することにより、総合的領域としての実践体育を印象づけ、基礎と専門との関連について強調している。

さて、選択できる6種目の中に、スクーバダイビングのライセンスカード取得を主眼とした夏季集中形式の海洋実習を設定してある。これは、国際的に認知されているスポーツダイビングのライセンス付与団体が指定するカリキュラムを主軸に2泊3日の実習を構成し、次亜的目的にマリンスポーツの体験学習を据えている。

なお、実習全体の企画立案は教員がおこなうが、カード取得に関する教程は認定指導者が実施しなければならないので、ライセンスに関する講習（座学・実技）はインストラクターを招聘している。事前学習として座学は設定された集中講義外に実施している。また、指導者以外に、より上位のライセンスを取得したOB・OGや既修得者がアシスタントとして参加するため、狭義の「ピアサポート体制」も構築できている。

3.参加型・行動型アクティブラーニング

水中での実技には時間的活動制限（ヒートロスや潜水疲労）があるため、ライセンス講習以外の時間がアクティブラーニングの実践時間である。就寝時間を除くと実習全体の40%程度である。大別すると陸上と水中であり、キャンプ形式による共同生活における課題と特異な動作様式に対する身体の運動能力獲得である。工夫の対象となる内容は、前者は食事準備の効率化であり、後者は不安定、もしくは、基底面を持たない動作様式の体勢コントロールである。いずれも経験的に知りえた情報と無計画な実行から始まるが、アクティブ化のための情報提供や最終目的達成の思慮を促す作業は必要であった。

発想の貧弱な集団には提供の方法を考えなければ単なる使役となってしまう。さて、アクティブ度を定量化するため、ワード検索とそのパーミテーションの定量化を試みた。

4.成果と課題

①知として得られたものを実践に移し、ビルドアップのための情報提供

カヌーのパドリングやボートのローイングに関し、艇の構造と推進システムの略図を示した。考慮する項目として、「抵抗」と「力の伝達」についてのみ提供した。結果として、キャッチングの位置や深さに関する合理性を認識し、道具に合わせる上肢の動作に関する着想があった。

②習得過程における部分局面をブラインド化し自己解決を促す

動作方法が未形成であるシュノーケリングやフィンキックにおいて、規定概念として比較されるプールでの水泳を取り上げた。学生には制限呼吸のため、上肢の動作に連動した呼吸タイミングが備わっている。シュノーケルを使用する場合、「息を吐く・空気を吸う」のトリガーは独自で設定しなければならない。一般的には、脚部のビートにてタイミングをとる場合が多い。また、足部より延長したフィンを推進に有効に活用する筋の活動部位について考えさせた。不必要動作を削除することをフィンの特性とともに試行錯誤し大腿部と下腿部の連動動作が完成した。

③レポート構成規定化による弊害

体育実技におけるレポートは個人的な動作分析と習得過程を検証したいがため課しているもので、感覚的な記述でよいものとした。しかし、学生は準備された解答に沿うようなレポートの作成を意識しているため、口頭での表現との間に差異が生じてしまう。なお、指定ワードとその順列は検証の指標として表現力の差異より評価できない。

④想定していたが発案に至らなかったもの

カヌーで磯に移動し魚釣りをする設定において、艇の安定性を増すための着想ができない。当初、使用目的を提示しない道具を準備していたが、竹とロープを使い2台のカヌーを結ぶ双胴化やアンカーの固定個所の工夫がなされない。

5.まとめ

高等教育における教養科目として内実を有した体育の授業を提供するため、スクーパダイビングの講師と協働で2泊3日の野外活動実習を企画・運営し、実験的・試行的実践を行ってきた。規定概念のない技術獲得には、下位理論の提示により動作構造と体系を自ら段階的に認識することができる。